

植民地時代前半期ペルー副王領における ポトシ銀貨の鑄造とその流通

真 鍋 周 三

はじめに

島根県立古代出雲歴史博物館（島根県出雲市）と石見銀山資料館（島根県大田市）において「石見銀山遺跡とその文化的景観」の世界遺産登録10年を記念して、石見銀山展（2017年7月）が開催された（二館同時開催）。そのさい、（古代出雲歴史博物館では）「ポトシの富の山 セロ・リコー世界遺産ポトシ銀山」のコーナーが設けられ、そこに1枚の「カルロス3世 8リアル銀貨」が展示された（2017年はポトシ銀山の世界遺産登録30周年記念の年でもあった）。この銀貨は世界を駆けめぐった後、日本に流入。愛媛県の大洲藩士の家に伝来する〔島根県立古代出雲歴史博物館、石見銀山資料館 2017: 44〕。大洲藩士が1822年に主君の長崎行きに随行したさいに手に入れたもので、この銀貨の材料である銀はポトシ産であり、1776年にリマで製造されたものだという。さらに「この銀貨には、多数の荘印の打刻が打たれている……ボリビアのポトシで産出された銀がリマで8リアル銀貨に鑄造され、アカプルコからマニラを経て、中国で使用された銀貨である……中国から日本の長崎、そして大洲へと伝わった、まさに世界を旅した銀貨といえよう」と解説されている〔島根県立古代出雲歴史博物館、石見銀山資料館 2017: 196〕。

この展覧会では、ボリビア多民族国ポトシ市の現カサ・デ・モネダ（Casa Nacional de Moneda. 国立造幣局博物館）¹から初来日した19点の展示品が公開された。この展示品の中で、とりわけ注目を引いたのがさまざまな銀貨であった。会場にはマクキーナ・8リアル銀貨やフェルナンド7世銀貨などが並べられた。

展覧会の開催中、その関連講座「石見銀山とポトシ銀山」において私は石見銀山の専門家と公開の対談を行った。石見銀山側から投げかけられた質問に、私がポトシ銀山側に立って答えるという企画であった。そこで16世紀を中心にペルー副王領における銀貨の鑄造やその流通の実態を調査する必要性を痛感した²。

1545年にポトシ銀山発見のニュースが広がると、シルバーラッシュが起き、銀山発見

¹ 現カサ・デ・モネダは旧王立造幣局（Casa Real de Moneda de Potosí）を基礎として1940年10月5日付けの政令によって、博物館・古文書館として再生された。歴史的資料のほか、精錬装置や貨幣鑄造用具、鑄造された銀貨、銀製品、絵画などが展示されている。

² 「貨幣」を理解するうえでは、カール・ポランニーの著作が参考になる〔ポランニー 1980: 186 - 207〕。

からわずか 2 年でポトシの山麓には 2000 戸の家が出現し、1 万 4000 人の人々が集まった [Mendieta Pacheco 2000: 247]。やがてポトシは南米大陸において最大規模の経済拠点となった。ポトシ市の人口は 12 万人 (1572 年) から 16 万人 (1611 年) にまで上昇する。それはヨーロッパの大都市、たとえばアムステルダムやロンドンが有する人口に匹敵したとされる。ポトシ市にはさまざまな商品がヨーロッパや東洋をはじめ海外から、また植民地域内から大量に集まり、市場経済が浸透していった。銀の生産によってポトシ市とその地区は一大消費センターとなった。ポトシへの供給品の代表的なものとしては食糧・日用品を主とする生活必需物資、舶来の奢侈品などがあげられる [真鍋 2011: 59]。

スペインは新大陸植民地から莫大な富を入手し続けた。サン・ルカル・デ・バラメダ (San Lucar de Barrameda) (スペイン・アンダルシアのカディス地方にあった都市) の港には、大量の銀が流入した。この町では「馬の蹄鉄までポトシの貴金属でできている」と噂された。ポトシから送られてきた銀塊や銀の延べ棒はセビーリャの造幣局で銀貨に鑄造されたという。ポトシでは建築・芸術上のめざましい活動が展開され、最盛期には 32 の大聖堂や 10 の修道院が存在した。精錬業者の威厳のある豪邸も人目を引いた³。

フランシスコ・ピサロ (Francisco Pizarro) による征服当初のペルーでは貨幣がなかったので、銀塊や延べ棒 (lingotes o barras) が「貨幣」として使用された。その後、扱い易くするために銀のかけらが出回るようになった。それはハンマーでマルタの十字架 (la Cruz de Malta) が彫り込まれた簡素なものであった。アルトペルー (Alto Perú. 現ボリビア) において最初のお金はフランシスコ・ピサロの命令によってポルコ鉱山 (la minería de Porco) で作成された。バホペルー (Bajo Perú. 現ペルー) でも同様にハンマーで十字架が刻まれたもの (アメリカの古銭学では “cruces” の名で知られる) であった [Mendieta Pacheco 1995: 11-12]。

ペルー副王領において最初の金属貨幣としての「銀貨」が出現するのは、(初代ヌエバ・エスパーニャ副王を歴任した) アントニオ・デ・メンドーサが第 2 代ペルー副王 (Antonio de Mendoza. 在位 1551 - 52) に就任してから以降である。副王メンドーサは銀貨を鑄造するよう命じた。ハンマーで銀塊を叩いて平板にし、それをハサミで切ったものであり、6 種類の銀貨 (4 レアル、3 レアル、2 レアル、1 レアル、0.5 レアル、0.25 レアル) であった。この銀貨は刻印はなく表裏に十字架を表す印章が押してあるだけの簡素なものであった。これがペソ・コリエンテもしくはプラタ・コリエンテ [流通銀 (peso corriente / plata corriente)] と呼ばれる銀貨である。ペルー副王領における最初の貨幣の誕生であった⁴。

³ [Mendieta Pacheco 2000: 250]。なお政治面で 1545 年から 1738 年までのポトシの全統治者 (一般にコレヒドールのレベル) の名前・人物について、グンナール・メンドーサが年表方式で示している。統治者の指名に当たったのは副王やアウディエンシアであった [Mendoza 1965: 479-485]。

⁴ [Cañete y Domínguez 1952: 158; Omiste 1996: 6]。

以後、ペルー副王領では金属貨幣として銀貨が出回ることになった⁵。

ペルー副王領でつくられた「銀貨」を検討するとき留意点がある。それは1570年代の初めポトシにおいて(スペイン王権による国家的レベルでの)王立カサ・デ・モネダ(Casa Real de Moneda de Potosí. 貨幣鑄造所)が操業を開始する以前につくられ出回ったペソ・コリエンテ(=プラタ・コリエンテ)〔流通銀〕のような銀貨と、ポトシのカサ・デ・モネダ操業以降に作られた、試金された銀貨であるペソ・エンサヤドもしくはプラタ・エンサヤダ(peso ensayado / plata ensayada)との相違点である(以下、peso corriente、peso ensayadoと原語で表記する)。両者の価値を比較すると、peso ensayado〔約450マラベディ(maravedies)〕はpeso corriente(272マラベディ)の1.65倍の価値があったと判断される⁶。peso ensayadoの段階になってはじめて、貨幣には人の手によって打刻がなされた。刻印(sello. 識別用の印)には硬貨の製造場所を示すモノグラム(組み合わせ文字または単一のアルファベット)が表示された。刻印には品質保証の意味があった。

ペルー副王領における貨幣の鑄造量を知るに際して、まずポトシにおける銀の生産量や生産動向に言及しておく。まず生産量から。ポトシの現カサ・デ・モネダの館長を歴任したメンディエタ・パチェコの見解では、「1545年から1704年までにその有名な山はスペインに16億7000万ペソという驚くべき量の銀をもたらした」「それは今日でいうと37億5750万ドルに匹敵する」とある⁷。またジョン・テパスケ(John J. TePaske)の研究を引

⁵ ポトシ以外にもペルーの銀鉱山としては、カストロビレイナ(Castrovirreina.1555年)、オルロ(Oruro.1606年)、カイリョマ(Cailloma.1620年)、セロ・デ・パスコ(Cerro de Pasco.1630年)があった。()内の年は操業年である。ペルー副王領全体における銀生産量のうち、ポトシはおよそ80%から85%を占めたとジョン・フィッシャーは考察している[Fisher 2000: 157]。

⁶ ペルー副王領において流通した銀貨は複数あった。それらの貨幣価値についてみておきたい。ノエホビッチは次のように指摘している。「1 peso corriente=272 maravedies, 1 peso ensayado=475 maravedies, しかし1 peso corriente対1 peso ensayadoは、1対1.65であった」と[Noejovich 2002: 774]。しかしpeso corrienteとpeso ensayadoの価値を、彼の指摘にある“maravedies”で比較してみると、「1.75」の値が出てしまう。つまり、 $475 \div 272 = 1.75$ となるからである。そこで、他の研究者の考えを参照すべく、新大陸の鉱山に詳しい英国の歴史学者ジョン・フィッシャーの著作にあたってみた。彼は「8リアル(reales)標準通貨peso de plata corrienteは272 maravediesの価値があった」(根拠: 1 real=34 maravedies. 34 maravedies \times 8 reales = 272 maravedies)。「多くの商取引ではpeso ensayadoが用いられた。その価値は425 maravediesと450 maravediesの間を揺れ動いた」と述べている[Fisher 2000: 168]。仮に1 peso ensayadoの価値を上限の「450 maravedies」として計算すると、「1.65」の値が出る。つまり、ノエホビッチのそれに一致する。現代の信用貨幣と違って、当時の銀貨の場合、流通に伴って重量の低下が生じたことが考えられ、それもあって計算が合わないのかもしれない。ロベス・ベルトランの「ペソの交換表」では重量(グラム)を基礎として換算比を示している。それによると「1.56」の値が出る。つまり「1 peso ensayado=42.286 gramos=12.5 reales, 1 peso corriente=27.064 gramos=8 reales」「1 marco de plata=230 gramos=8 onzas」「1 real=3.383 gramos」としているからである[López Beltrán 1988: 11]。またバイクウエルは、日常の商取引では通貨の標準単位であるplata corriente(272maravedies = 8 reales. 銀貨の重量に直すと1オンス(重量の最小単位)=1/16ポンド=28.35gramos)が使われ、それは8リアルに再分割(1リアルは34maravedies)することができた、と述べている[Bakewell 1984: 198]。その他、[Arduz Eguía 1985: 137-138] 参照。このように研究者によって銀貨の価値の分析や理解には若干の差や多様性がみられる。だが本稿では、(ノエホビッチの指摘する)「1.65」をもって、peso corrienteとpeso ensayado両者の価値差として論を進めていきたい。

⁷ [Mendieta Pacheco 2000: 250]。メンディエタ・パチェコのこの見解から、ペソとドルとの換算比がわかる。すなわち「1ペソ=2.25ドル」ということになる。

用したケンダル・ブラウンの著書には、「1545年から1823年までの期間にポトシの山は正式には2万2695メートルトン（重量の単位。1メートルトンは1000kgであるから、これは2269万5000kgとなる一筆者）を生産した」[Brown 2012: 17]と述べられている。しかしながら研究者たちが依拠した史料に示されている銀生産量を示す数値には大きな差がみられることや、脱税など諸般の事情を考慮すると、銀生産量の正確な数値を特定することは事実上不可能である。しかしポトシ銀の生産傾向についてはどの研究者の場合にも似通っている。1570年代半ばに水銀アマルガム法が導入されてからは「脱税」の幅が狭められたから、銀生産量は「5分の1税」(quinto real. 新大陸スペイン領植民地において貴金属生産量の5分の1を王権が徴収する税)の徴収額とほぼ平行している⁸。

ところで、「5分の1税」の徴収記録⁹は、ポトシの発見から1555年までの11年間は存在せず、その徴収記録は1556年から開始される。1556年は、第3代ペルー副王カニエテ侯(Andrés Hurtado de Mendoza, marqués de Cañete. 在位1556-60)の統治が始まった年である。ペルーの内乱がほぼ終わりを告げ、ペルー植民地統治が始まった年であった¹⁰。しかし当時の精錬方法がワイラス法(インカ時代から存在した原住民による銀の精錬方法)¹¹であったため、「5分の1税」の徴収はルーズであり、「5分の1税」未払いの銀が依然として流通していた。また「5分の1税」は、ポトシのカサ・デ・モネダが設置され、王権主導の下での銀貨鑄造が始まるまでは、銀塊とか延べ棒もしくはpeso corrienteで支払われた。

plata corrienteの基本的な特徴は、低品位銀のかけら(tejos de plata baja)であった。銀塊がハサミで切断された形状のものであり、刻印(sello)はなく、しかも銅や鉛もしくはスズとの合金であり、試金されずに出回っていた。品質保証が十分ではなかった[Omiste 1981: 2; Mendieta Pacheco 2000: 247]。

ポトシ銀の生産量がだいたいにおいて測定可能となるのは、第5代ペルー副王トレド

⁸ 17世紀以降のポトシの銀生産をめぐる研究者の(断片的な)考察がある。例えば、メンディエタ・パチエコは、「1601年から1610年にかけて銀生産は年間7000万ペソを記録した。だが1621年から1620年にかけては5000万ペソに下がった」「1720年には(年間生産が)1500万ペソにまで下がった」と考察した[Mendieta Pacheco 2000: 251]。また17世紀後半期についてはどうか? フィッシャーは、この時期のポトシの生産量は著しい下落傾向をたどったと指摘している。しかしながら、フィッシャーが掲げた生産量の数値自体はあまりにも低いように思われる[Fisher 2000: 169]。他方でアンドリーエンの著書を見ると、ポトシの銀生産が下落を遂げたとする考えは同じだが、その数値に関しては上記の説とは大きく異なる。すなわち、1600年の712万9719ペソから1650年には442万8594ペソに落ち、1700年には197万9128ペソにまで落ちたと記されている[Andrien 1985: 14]。

⁹ 「5分の1税」の徴収記録は、Lamberto de Sierraのものが最も正確である。[Sierra 1964: 172-178; 真鍋1995: 14]。

¹⁰ [真鍋2004: 318; 真鍋2012: 2]。ビルカバンバの新インカ国家(サイリ・トゥパック。在位1544-60)の抵抗は依然として続いていたけれども。

¹¹ 16世紀のワイラス法については、原住民がワイラ(huayras. 風炉)を操作している姿が[Mira 2000: 111]に紹介されており興味深く拝見できる。1570年のころポトシには6000以上のワイラがあったという[Salazar-Soler 2003: 289]。

(Francisco de Toledo、在位 1569 - 81) の時代に入ってから、つまり 1575 年以降水銀アマルガム法精錬が本格化してからである。基本的に「5 分の 1 税」の徴収額を 5 倍にした分量が全生産高ということになるからである¹²。

植民地時代新大陸における銀貨についての研究史であるが、わが国においては皆無の状況であり未開拓の領域である。またペルーやボリビア、欧米においても研究蓄積は少ない¹³。本稿では、16 世紀を中心にペルー副王領における銀貨の製造（鑄造）と流通について考察する。副王トレド登場以前の時期と副王トレド登場以降の時期とに分けてそれぞれの事項を検討・考察してみたい。

1 銀貨の出現

フランシスコ・デ・トレドがペルーに到着し、第 5 代ペルー副王（在位 1569-81）として統治を始め、ポトシにカサ・デ・モネダを設置するが、本章では、その操業が開始される以前に出回った銀ならびに銀貨についてまず述べる。次に、ポトシのカサ・デ・モネダにおいて鑄造された銀貨である peso ensayado の特徴を考察する。

1. 副王トレド登場以前の状況

ペルーでは征服時から貴金属の一部が「延べ棒」に改鑄されたのは周知のところである [真鍋 2004: 307-309]。それは、持ち運びしやすいコンパクトな形状に改変するというやり方を示している。ポトシ銀山の開発によって得られた銀の場合も当初は同様の方式がとられた。1548 年に最初のポトシ銀（5 分の 1 税）がスペイン王室に届けられたが、その際にアルティプラノ（アンデスの高原地帯）からアンデスの西斜面を太平洋沿岸まで搬出されたときの状況をみてみよう。7771 個の銀の延べ棒が 2000 頭のリヤマに積まれて輸送された。100 人のスペイン人人夫頭が輸送隊を指揮し、1000 人の原住民アリエロ（役畜の御者）がリヤマを操作し、一行は 6 か月の道のりを進んだ [Mendieta Pacheco 2000: 247]。

新大陸において「銀貨」の鑄造はわりあい早い段階で行われる。1536 年にスペイン王室はメキシコ市において新大陸で最初のカサ・デ・モネダを配備した。1565 年にはリマ市にカサ・デ・モネダを設置した。さらにその後ラプラタ市 [チュキサカ市。現スクレ市。チャルカス（現ボリビア多民族国にほぼあたる）のアウディエンシア（Audiencia de

¹² 1570 年代半ば以降、精錬部門への水銀の供給が銀生産の生命線となり、「5 分の 1 税」は、鉱山業者（精錬業者）が申告する「銀の生産量」をベースとしてではなく、ポトシ財務府の水銀販売記録を基に銀生産量が自ずから割り出され、これで「5 分の 1 税」課税額が決定されたからである（鉱山業者によるごまかしが効かなくなった）[Capoche 1959: 24]。

¹³ ポトシ銀の海外への流出という点でみると、それは西洋経済史における「価格革命」「商業革命」「近世資本主義の成立」などの視点から考察されてきた [Hamilton 1977; 近藤 2011] 参照。

Charcas) (「アウディエンシア」とはスペイン領新大陸植民地の司法・行政を司る王立機関の首都) にもカサ・デ・モネダが設置されたといわれている (ラプラタ市のカサ・デ・モネダは 1574 年末か 1575 年の初めに閉鎖された。またそこにあった機材一式はポトシに移された) [Omiste 1981: 6-7; Mendieta Pacheco 2000: 247; Mendieta Pacheco 1995: 12]。

新大陸では「貨幣観念」はスペイン人による「征服」と同時に導入されたから、リマ市においてスペイン人により貨幣経済が志向されたのは無理からぬことであった。膨大な量の金銀をスペイン人は所有しており、はやくもそれによって商取引が始まろうとしていた。また「貢納 (tributo. 原住民は法的にはスペイン国王の臣民とされ王権が共同体の 18 歳から 50 歳までの成年男子に一律に課した税)」の支払いにも貴金属の断片が使われ始めた。やがて植民地役人らの間からペルー副王領の首都リマにおいてカサ・デ・モネダの設置を望む声がスペイン王権に届く。1551 年から紆余曲折の後、リマにおけるカサ・デ・モネダの設置が承認され、1568 年リマにおいて貨幣鑄造が始まった。しかし意気込みとは裏腹に、それはたいした機能も果たさずに終える (原料である銀塊のリマへの提供がうまくいかなかったのが主な原因と判断される)。1572 年リマのカサ・デ・モネダは閉鎖され、ポトシのそれにとって代わられていく¹⁴。

2. ポトシのカサ・デ・モネダにおける銀貨の鑄造

副王トレドの時代になってペルー植民地統治が確立される。レドゥクション (reducción. 原住民の集住政策) が行われ、原住民人口の動態把握がいちだんと前進を遂げる [真鍋 2012: 2-11]。副王トレドはペルー植民地を巡察。そこで、peso corriente の流通を目の当たりにする。それは貢納の支払いにも充てられていた。人々はなるべく品位の低い銀貨によって納税しようとしていた。そうした事態に歯止めをかけるという意図もあり、品位の統一された貨幣を造ろうと考えた。1572 年 12 月、ポトシを再訪したトレドは都市基盤の整備に尽力するが、そこにはカサ・デ・モネダの設置計画が盛り込まれていた [Arzáns de Orsúa y Vela 1970: 37]。1573 年か 1574 年頃、ポトシの (最初の) カサ・デ・モネダが設置された¹⁵。ポトシの棟梁ヘロニモ・レト (Jerónimo de Leto) が建築の仕事を受け負い [Cañete y Domínguez 1952: 159; Fernández 1979: 56]、その建設費用は「8231 ペソ (peso corriente) あまり¹⁶」を要した。レゴシホ広場 (plaza de Regocijo) の南側、マトリス教会 (la iglesia Matriz) に面した 45 バラ (varas castellanas. バラとは長さの単位。83.59 センチ。

¹⁴ [Omiste 1996: 6, 14]。リマのカサ・デ・モネダは「新レアル (nuevos reales)」の鑄造にとどまった。「1568 年」は副王トレドによるペルー統治が始まる以前であり、この時点ではポトシの発展がまだそれほど見込まれてはいなかった。

¹⁵ ポトシの (最初の) カサ・デ・モネダの建物が完成したのは 1573 年 12 月、その操業が始まったのは翌 1574 年 3 月 28 日といわれている。また 2 度目のカサ・デ・モネダ設置は 1759 年であった。

¹⁶ 正確には、「8231 pesos, un tomin y 13 gramos de plata corriente」であった。

45 バラは約 37.6 メートル) 平方の場所に建てられた¹⁷。

カサ・デ・モネダの主要な役職者は副王トレドによって指名された。財務官 (tesorero) にはファン・ロサノ・マチューカ (Juan Lozano Machuca) が指名され、検査官 (ensayador) にはアルフォンソ・リンコン (Alfonso Rincón) が選ばれた。リンコンはスペインやメキシコ、リマなどにおいて長期間エンサヤドールを歴任してきた¹⁸。

副王トレドが鑄造を命じたのは 8 レアル銀貨 (pesos/ps. de a 8 rs.) であった。ポトシのカサ・デ・モネダで鑄造された硬貨のひとつひとつには刻印 (識別用の印) (marca/sello del contraste/ cuño) が押されており、刻印には硬貨の製造場所を示すモノグラムが表示されていた。ポトシで鑄造された銀貨の刻印のモノグラムは「P」であり、「P」の字が入ったマクキーナ 8 レアル銀貨 (pesos/ps. de a 8 rs./ macuquinas) —ハンマーによる殴打によって製造されたため、「マクキーナ (macquinas/ macuquinas)」と命名された。

写真 1 peso de 8 reales. Potosí. 1573. macuquina



出所: [López Beltrán 2016: 37]

“macquinas” とはケチュア語に由来し、「叩いて鑄造されたもの」という意味である—の製造が行われ始めた(写真 1)。peso ensayado の誕生である¹⁹。まず銀貨 2000 マルク (marco. 金銀の重量単位。1 マルクは約 230 グラム。よって 2000 マルクは 460 キログラムにあたる) が、6 月には銀貨 6000 マルク (1360 キログラム) が製造された。以来、ポトシ銀貨は増産の一途をたどる。しばらくすると年間 6 万マルク (1 万 3800 キログラム) の生産に向けて、(銀塊をカサ・デ・モネダに提供するうえでの) 仲介人ファン・デル・カスティージョ (Juan del Castillo) との間で契約が結ばれた。これは 4 か月ごとに平均 2 万マル

¹⁷ カサ・デ・モネダの場所の詳細は、[真鍋 2012: 4] の「17 世紀ポトシ市の市街図」参照。またその面積に関して、「75 バラ平方」との考えもある。

¹⁸ 17 世紀入る頃にはバスク人がその役職に就任する傾向があった。その他、財務府との関係など、[真鍋 2017: 74-78] 参照。また [Brown 2017: 25-26] にも指摘がある。

¹⁹ ポトシのカサ・デ・モネダの (刻印の) モノグラムは時期によって異なる。1574 年から 1773 年までの時期のそれは「P (単一のアルファベット)」であるが、1767 年から 1825 年までは「PTS (組み合わせ文字)」となった (これは当時ポパヤンに設置されたカサ・デ・モネダで作られた銀貨との混同を避けるためであった)。また鑄造の時期によって銀貨の形状・名称も推移する。つまり、monedas macuquinas (1574-1773 年)、monedas columnarias (1767-1773 年)、monedas de busto (1773-1825 年) である。

ク（4600 キログラム）を生産する割合である [Cañete y Domínguez 1952: 160; Omiste 1981: 21]。ポトシで発行された銀貨はやがて世界に知られるところとなり、「ポトシほどの価値（Vale un Potosí）」というセルバンテスの言い回しは不動のものとなる。

カサ・デ・モネダ発足当初、貨幣鑄造の技術水準はそれほど高くはなかった。人の手によって打刻された銀貨であった。鑄造された 8 レアル銀貨には湾曲がみられ、不完全な円形であった。18 世紀カルロス 3 世時代につくられた銀貨のように整った形をしてはいない²⁰。

精錬された銀塊がカサ・デ・モネダに届けられ銀貨に鑄造されるまでの手順・経路についてみておこう。精錬業者（鉱山業者）は銀塊を「鑄造所（fundición）」に提出する。そこで「延べ棒（barras）」の形に加工される。この段階で最初の試金（contraste）が行われた。そして品位（銀位）に問題がなければ、その延べ棒はポトシ財務府（la Caja Real de Potosí）²¹に届けられた。ポトシ財務府が「5 分の 1 税」を徴収した。なお、「5 分の 1 税」の徴収に伴う試金作業の代償として少額の税（「溶解料金」）も財務府は徴収した。納税・試金済みの延べ棒には刻印が打たれ、この作業の完了後、延べ棒はカサ・デ・モネダに運ばれ、エンサヤドールをはじめとする重役が当該の延べ棒の銀の含有率を測定。その結果が法定通りになっていることが確認された後、銀貨の鑄造段階に入った。これらの一連の業務の過程には銀商人（mercaderes de plata）が深く介在した。銀商人にとって自身の仕事は高額な現金による投機的・冒険的仲介事業であった。精錬業者には高額資金の「貸付」を行うことが要求され、「5 分の 1 税」の支払いを担いもしたから、銀商人は高額な現金を準備する能力がなければならなかった。また銀商人は財務府やカサ・デ・モネダの役人と交渉する関係上、官僚的かつ専門的な知識を要求された [Omiste 1981: 20-21; 林 1977: 1, 18; Bakewell 1988: 45-46]。

上記について少し補足すると、「刻印が打たれた延べ棒」がすべてカサ・デ・モネダへ直接流れ貨幣化されたかという、否である。それが商品として出回るケースもあったようである [Brown 2012: 25]。

ポトシ銀貨は多種つくられた。それぞれの貨幣価値については研究者の指摘がある [Mendieta Pacheco 2000: 251; Capriles Villazón 1977]。各銀貨の価値が現代のドルと対比されており興味深い。また冒頭でもふれたが、試金を経て王権から公認された銀貨である

²⁰ [Mendieta Pacheco 2000: 250, 254, 256-258]。18 世紀カルロス 3 世（在位 1759 - 88）によるブルボン改革では、（それまでに低下していた）ポトシ銀鉱業の回復もはかられる。1759 年から 1773 年にかけて新しいカサ・デ・モネダの建設が行われた。圧延機（maquinas laminadoras de metal de plata）が導入され、新しい銀貨（monedas columnarias de plata）が誕生する。

²¹（スペイン本国・財務省の配下にあった）ペルー副王領の財務府については、リマ財務府が中心であった。17 世紀にはリマ財務府は副王領内の各地方に約 16 の支部を置き、全体を統括した。中でもポトシ財務府は最重要支部の一つであった。リマ財務府の支出額構成（1607-90 年）などを含めてその実態は、[Andrien 1985: 65, 72, 92] に詳しい。

peso ensayadoの方が、粗雑な銀貨である peso corriente よりもおよそ 1.65 倍高い価値があったことをここで再度確認しておきたい²²。

ところで、17世紀半ばになると品位(銀位)の低い貨幣が流通するようになった。それは、ポトシのカサ・デ・モネダにおいて貨幣鑄造の面で「偽造 (falsificación)」が行われていることを意味していた。1648年の時点で、カサ・デ・モネダにおいて鑄造されたほとんどすべての銀貨が、スペイン法に照らして低品位の銀によって作られていることが発覚したのである。ポトシ銀貨の偽造は、ポトシ社会のエリートによる不正行為であった。事件には銀商人とエンサヤドールをはじめとするカサ・デ・モネダの役職者²³を主軸に、ポトシ政財界のトップが関与していたことが明らかとなった。そしてこの問題は結局ポトシの斜陽化を招く一因となる [Cañete y Domínguez 1952: 161-164; Brown 2012: 27; Omiste 1996: 9, 109-110; Omiste 1981: 357]²⁴。

II (ポトシ周辺部地域への)ポトシ銀貨の流出

ポトシ銀流出の一端をうかがい知るには、ポトシ周辺部地域に存在した原住民共同体に課せられた貢納の納税形態の変化を手がかりとしてみていくのがよい。というのも、ポトシの富は、その周辺部にすでに存在していた社会的に組織された労働力と物資の供給を通じて生み出されたものだからである。周辺部原住民社会のうち、ここでとりあげるのはアルティプラノ(アンデス山脈中部の山間にある広大な高原地帯)を代表するチュクイート地方 (la Provincia de Chucuito) である (地図 1)²⁵。

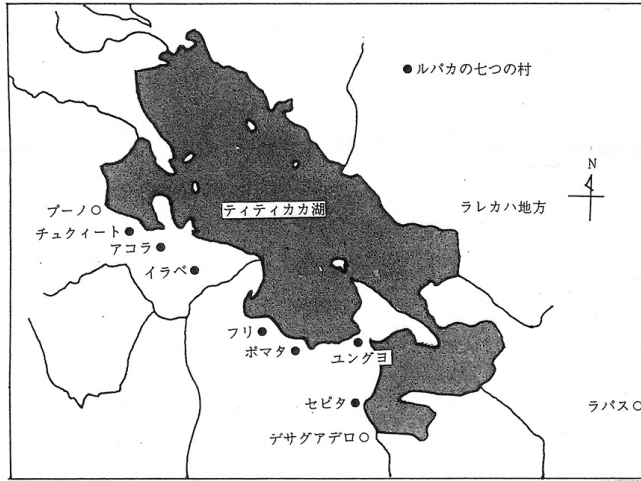
²² [Noejovich 2002: 775]。ノエホビッチはまた「18000 pesos ensayados が 29700 pesos corrientes にあたる」と述べている。「 $29700 \div 18000=1.65$ 」である。

²³ インディアス法 (la ley 14, tit.23, lib.4. de Recopilación de las leyes de Indias) によってカサ・デ・モネダには多くの役職が設けられたが、なかでもとくにエンサヤドールは重要な役職者となった。他の役職者としては財務官 (tesorero)、鑄造担当官 (fundidor)、刻印担当官 (marcador)、重量計測官 (balansario)、書記官 (escrivano) (以上は、各 1 名)、複数の警備官・監視官 (guardas) や下級官吏 (oficios menores) らが配置された [Paredes 1973: 131]。

²⁴ ポトシ銀貨偽造の問題について筆者は、「17世紀ペルー副王領のポトシにおける貨幣の偽造とその影響」のタイトルで論文を作成中であり、行論の関係からもこれ以上は扱わない。

²⁵ チュクイート地方についてはワシユテルによる詳しい紹介がある [ワシユテル 1984: 160 - 167]。

地図1 チュクイート地方



「サマ」は現ペルー・タクナ県サマ川流域に、「カピノタ」は現ボリビア・コチャバンバ市南西部（コチャバンバ県）にそれぞれ位置する。

出所：[真鍋 1995: 21]

同地方に課せられた貢納やポトシのミタ（mita. 強制労働。その対象は18歳から50歳までの原住民成年男子）の変遷過程をみていく。次に、ポトシ周辺部地域全般からポトシに供給された商品の対価として支払われた銀貨を検討する。

1. ポトシ銀貨流出のメカニズム—チュクイート地方のケースから

チュクイート地方は海拔高度3800メートル以上のティティカカ湖西岸に位置し、とりわけ大規模な原住民人口を擁する地域であり交通の要衝でもあった。インカ時代から「ルパカ（Lupaca. 民族名）」と呼ばれてきたアイマラ語圏である。ティティカカ湖西岸に沿って主要村落が点在する。チュクイート（Chucuito）を筆頭にアコラ（Acora）、イラベ（Ilabe）、フリ（Juli）、ボマタ（Pomata）、ユングヨ（Yunguyo）、セピタ（Zepita）の7か村〔プエブロ（pueblo）〕である。そして太平洋沿岸のサマ（Sama）やモケグア（Moquegua）の渓谷部や、またアンデス東部のラレカハ地域（Larecaja）やカピノタ（Capinota）などに先スペイン期からミティマエス（mitimaes. 移民）を送り込んでいた。ルパカの人々は昔からコスタからセルバまでにわたって情報をキャッチし交換するとともに、労働力の移動、物資の交換を行ってきていた²⁶。

²⁶ こうしことは、「垂直統御」（注32を参照）にもとづく単純な経済決定論の観点からだけでは説明しきれない。つまり両者間における人の移動や物資の補完関係を考える上で歴史や文化の基層があるように思われる。そこで想起されるのが、これらの地域がかつて「ティワナク文化圏」に所属していたという事実である〔真鍋1995: 23; 真鍋2013: 49; Assadourian 2002: 748〕。チュクイート地方には早くから（例外的に）コレヒミエン

(1) 副王トレドの時代以前

1553年におけるリマのアウディエンシアの査定 (tasa)²⁷によれば、チュクイート地方の貢納額は、年間に「2000ペソの銀²⁸」、リヤマの毛でできた1000着の衣類 (mil vestidos de lana de cumbi y auasca)、1000ファネガ (ファネガ fanega は体積の単位。1ファネガは55.5リットル。よって1000ファネガは5万5500リットルである) のトウモロコシ、ポトシで需要があった1200ファネガ (6万6600リットル) のチューニョ (chuño. ジャガイモを冷凍乾燥させてつくった保存食) や家畜などである。このうち2000ペソの銀は、同地方の人々がポトシに物資を提供し、その支払いとして得られ、それが貢納として支払われたものである。また1200ファネガのチューニョと90頭の家畜も (貢納として) ポトシに提供された [真鍋 1995: 28-29]。

1559年にチャルカスのアウディエンシアが設立されたのと同時に、副王カニエテ侯による査定が行われ、チュクイート地方の貢納税額が著しく引き上げられる。従来の2000ペソの銀は年間に「1万8000ペソ²⁹」へと9倍に増額された。そしてこの1万8000ペソの支払い手段として、共同体側は年間に500人の原住民をポトシ銀山のミタに提供し、彼らに支払われる俸給額でその一部を穴埋めした。この500人の1人当たりにつき「40ペソ (peso corriente)」を貢納の支払いに充てるようはかられた³⁰。また「1000着の衣類」については、各村の共同体成員がポトシに運び、そこで売却して銀に換えられた。その販売額は時代が進むにつれて変化し、1559年には7000ペソ、1564年には6000ペソ、1565年では5500ペソ、1566年では4000ペソであった [真鍋 1995: 29 - 30; Diez de San Miguel 1964: 208]。

次に、巡察使ディエス・デ・サン・ミゲル (Garci Diez de San Miguel) がこの地方を巡察した翌年 (1568年) に出された法令で、従来の「1万8000ペソ」の銀は「2万ペソ」に引き上げられた。この2万ペソの根拠は「500人×40ペソ = 2万ペソ」にあると判断される。また「1000着」の衣類の税は「1600着³¹」へと引き上げられた [真鍋 1995: 30; Diez de San Miguel 1964: 208]。

ト (corregimiento. コレヒドールによる支配体制) が導入された。ガルシ・ディエスが巡察した当時 (1567年) のコレヒドールはルイス・デ・エストラダ (Ruiz de Estrada) であった。またチュクイート、フリ、セビタにはコレヒドールの代理人が配置されていたという [Diez de San Miguel 1964: 48, 199-200, 240]。

²⁷ 当時、「副王」は空位の状態にあり、リマ・アウディエンシアのオイドールが統治していた (la Real Audiencia de Lima, presidida por el Oidor Don Melchor Bravo de Savavia y Sotomayor. 在位 1552-1556)。

²⁸ 2000ペソの銀の単位について、史料には“pesos de plata ensayada”とある [Diez de San Miguel 1964: 207]。

²⁹ [Diez de San Miguel 1964: 208]。1553年と1559年の査定におけるペソの単位表記 (pesos de plata ensayada) は理解に苦しむ。当時、ポトシのカサ・デ・モネダはまだ設置されていなかったからである。

³⁰ [Assadourian 2002: 750]。この500人がポトシで貢納の支払いのために稼いだ額をマンガンは、3万ペソと述べている [Mangan 2005: 33]。

³¹ この衣類 (piezas de ropa) の内訳は、1000着 (ropa de auasca. 上製の衣類) と600着 (ropa de cumbi. 粗製の衣類) である [Noejovich 2002: 774]。衣類の質の内訳については、ワシユテル、前掲書、161頁の記述にしたがった。両者ともリヤマの毛でつくられていた。

チュクイート地方は標高が3800メートルを超える高地であり、1553年の査定に登場している「トウモロコシ」は同地方では収穫できなかった。そこでチュクイート地方の人々は太平洋沿岸部のモケグアやサマ、東部のラレカハやカピノタ、さらには東部亜熱帯低地のラパス・ユングス（Yungas de La Paz）などから調達した。そこにはトウモロコシや小麦栽培用に、同地方のカシケ（cacique. 原住民共同体首長）の農地（chacara/chacra）も存在していたという [Diez de San Miguel 1964: 50, 57-58, 245]。またそれらの地域 [「生態学的列島入植地 (colonias archipiélagos ecológicos) 」と定義される [López Beltrán 1988: 45-46]] には先スペイン期から同地方からのミティマエスが送り込まれており、同地方はコスタからセルバにいたるまでの広大な地域にわたって物資を入手していた。「垂直統御」の方式である³²。アンデス高地では人々は協力や連帯がなければ生きていけない。その荒々しい自然環境に負けてしまう。そこでとられたのがこの方式である。

現金の入手が必要になると、人々は商業や輸送業に邁進した。例えば、同地方では「300人以上の原住民がクスコからポトシへ家畜を使ってコカを運んでいた……1人当たり14から15ペソが支払われた」 [Diez de San Miguel 1964: 58, 218] との記録がある。ポトシにかサ・デ・モネダがまだ設置されていなかった時点から「銀貨」が原住民社会に浸透していた様子がかがいが知れる。またここで、原住民社会にたいして貢納がおよぼした作用について確認しておく、貢納が原住民に課せられた場合、原住民側は自分たちが所有している物資をポトシ市場なり近くの市場に運び、そこで売却して現金を得てそれで貢納を支払うか、もしくは労働力をポトシなどの労働市場に提供してそこで賃金を得てそれで貢納を支払うか、という二つの方法があった。これが原住民社会における貢納の作用であった [真鍋 1995: 62]。当時出回っていた銀貨は peso corriente であった [Omiste 1981: 2; Mendieta Pacheco 2000: 247]。ポトシでは多くの原住民が鉱石採掘や精錬業務に従事していたが、「日給はいつも plata corriente で支払われていた。その銀は質がとても悪かった。ほかの金属が混じっていた…」という鉱山労働者の証言が残されている³³。

（2）副王トレドの時代

副王トレドの時代になるとポトシ周辺部の原住民共同体に課せられていた貢納が引き上げられ、またミタは王権の側から再編成されその規模が高まった。

³² チュクイート地方とその周辺部「列島」との関係は、「垂直統御」のモデルケースとしてよく話題にのぼる [Murra 1996: 126-129]。「垂直統御」の考えは、物資の生産や補完関係をアンデスにおける海拔高度の次元から生態学的に説明したものであり、アンデス地域研究に大きな進歩をもたらした。「垂直統御」とは、正確には「アンデス社会の経済における生態学的階床の最大限垂直統御 (el control vertical de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas)」という。

³³ 原住民ファン・カспа (Juan Caspa) の証言 [Mendieta Pacheco 2000: 248]。

チュクイート地方に対して副王トレドは貢納やポトシのミタの査定を 1572 年、1574 年、1579 年（もしくは 1580 年）と 3 度実施した。1572 年末に行われた査定で同地方からポトシのミタに派遣される予定者〔efectivos. 以下、efectivo と原語表記する。「ミタヨ (mitayo. ミタ労働者。ポトシ銀山において実際に労働に服している者をさす)』との混同を避けるためである〕は年間「1000 人」となった。これは従来の年間「500 人」の 2 倍である。1572-1574 年の同地方の貢納納入者 (tributarios) であると同時にミタに服する予定者（両者ともにその対象は 18 歳から 50 歳までの成年男子）の人数は 1 万 7779 人。その内訳はアイマラ人 (aimara/ aimará) 13275 人、ウロ人 (uro) 4054 人、それにミティマエス（モケグアの 303 人、サマの 334 人、ラレカハの 72 人）である³⁴。次に 1574 年に行われた査定において副王トレドは、同地方の貢納やミタを調整するため、当地方の布教にあたったドミニコ会修道士グティエレス・フローレス師 (fray Pedro Gutiérrez Flores) とラミレス・セガラ (Ramírez Segarra) を巡察使に任命して現地を調査させた³⁵。その結果が副王に伝えられた。新たな査定が行われ、当地方の貢納はすべて銀による支払いに一本化され、「年間 8 万ペソ (peso ensayado)」と確定した。同地方の貢納額は 1553 年の 40 倍につり上げられたのである [真鍋 1995: 30; Assadourian 2002: 742]。またこの地方において「富裕な 1000 人の原住民 (los mil indios ricos)」が選出され、この 1000 人が合計「5000 ペソ (pesos ensayados) の貢納」（この額全体に占める割合は「6.25%」）を負担することになった。巡察使によるとこの 1000 人は、家畜（家畜 1 頭の値段は 5 pesos ensayados）や毛、衣類を普通の原住民以上に所有しているということであった [Assadourian 2002: 752, 755-757]。

ここで、ミタについて重要な点を指摘しておく。まず、「富裕な 1000 人の原住民」がミタの義務から外されたこと、次に、同地方からポトシのミタに送られる予定の 1000 人（この 1000 人は上記した「富裕な 1000 人」とは別である）に対して、1 人の efectivo につき「年間 24 ペソ (pesos ensayados)」の額をポトシ財務府が支払うよう副王トレドが決定した³⁶。その合計額は 2 万 4000 ペソ (pesos ensayados) となる（24 ペソ × 1000 人 = 24000 ペソ）。そしてこの額は、同地方に課せられた貢納 8 万ペソの支払いの一部にあてられることになった。それは 8 万ペソの 30% を占めた（24000 ペソ ÷ 80000 ペソ = 0.3）。さらに副王は 1574 年の査定を見直し、ポトシへの efectivo の人数を増やすことにした。その人数は年間「1100 人」になり（1575 年頃）、そして最終的に年間「2200

³⁴ [Assadourian 2002: 749]。これらのミティマエスはチュクイート地方の貢納は支払ったが、ポトシのミタには行かなかった [Saignes 1987: 112]。

³⁵ 書記はルイス・ガルシア (Luis Garcia) [Noejobich 2002: 767]。

³⁶ その支払いの時期と方法は、サン・フアンの日（6 月 24 日）とクリスマスの日（12 月 24 日）に半額ずつ払うというものであった。

人」³⁷となった(1578年)。また第3回目の査定の結果、貢納の支払い構成は銀による負担(50.7%)、ミタによる負担(ポトシ財務府によるミタ労働者1人当たりへの支払額は年間15ペソ余りに引き下げられた後)(43.5%/これは「8万ペソ」中34800ペソ分を占める)、ポトシでの衣類(ropa)販売による負担(5.8%)になったと歴史家アサドリアンは分析した〔()に示した%は同地方から王権に支払われた全貢納額8万ペソに占める割合〕。ミタによる貢納支払い負担の割合が著しく高まった。つまりトレードの査定によって、2200人にはポトシ財務府から「俸給」が支払われたが、この金額が貢納額のうち「43.5%」(3万4800ペソ)分を担い負担したことになる³⁸。「貢納」と「ポトシのミタ」は密接に絡み合い連動していたことがわかる。チュクイート地方に課せられた貢納は銀(銀貨)による支払いに一本化されたわけであるが、その単位はpeso ensayadoであった。

チュクイート地方はポトシ銀山の労働力需要やポトシ市場の商品需要に規定され、この需要に応じて大規模な原住民労働力や生活必需物資をポトシに提供した。このことは、同地方に課せられた貢納を支払うための方策であった。

同地域に住む人々は、地元では獲れないトウモロコシや小麦、野菜・果物、ココアの葉などの生活必需品の多くをシエラ以外の場所から調達しなければならなかった。しかしそれらが育つ場所は遠く離れたところにあった。西には西コルディレラ山脈が、東にはティティカカ湖や東コルディレラ山脈があつて遮られていた。人々は、はるか西方の太平洋沿岸の溪谷部に「列島入植地(colonias archipiélagos)」すなわち「エンクラベ(enclave. 飛び地)」を設け、そこからトウモロコシや小麦、綿花等を得ていた。また人々は東コルディレラ山脈の東斜面においても同様に入植地を運営・維持・管理していた。代表的な入植地としては現ボリビア多民族国のラレカハ地域、カピノタ、チカロマ(Chicaloma³⁹)などの小村が

³⁷ 2200人の内訳は、アイマラ人にミティマエスを加えた合計が1800人、ウロ人が400人であった[Noejovich 2002: 782]。ミタの準備について記す。ミタ該当地方のコレヒドールはポトシのミタ担当官と協議し、ミタ対象者(efectivos)のリストを作成した。このリストはポトシの当局者に伝えられた。ミタの差配人はefectivosがポトシに行くのに同行した。ミタ労働者(ミタヨ)による採鉱部門での仕事は[真鍋 1995: 15-16, 36-37]参照。鉱石が地表に出された後のミタヨの仕事ぶりを研究者(ブラウン)が描いている。かいつまんで言うと以下のものであった。ミタヨは月曜日の朝、セロ・リコの麓に集合させられた。(ポトシの)スペイン人のミタ担当役人(alcaldе mayor de mita)と(地方から同行してきた)ミタ差配(capitán general de la mita/capitán enterador de la mita)(もしくはカシケ)が仕事の段取りを彼らに通達した。何人かは鉱石の運搬係(apiris)に割り当てられ、重い鉱石を精錬所に運んだ。ある者は精錬所に送られ、鉱石の粉碎やアマルガム部門を受け持った。リヤマも頻繁に使用された。もしも(定められていた)ミタヨの人数が足りなかった場合は、当該地方の原住民共同体アイユはミタヨの不足分を現金で補填しなければならなかった。不在のミタヨの代わりに賃金労働者を雇う必要があったからだ。一般労働者すなわちミンガ(minga)の雇用である。ミンガに支払われる俸給は1日当たり、8~9リアルであった。それはミタヨに支払われる給金の2~3倍に相当した[Brown 2012: 53-55]。

³⁸ [Assadourian 2002: 761-764]。しかしビアンカ・ブレモの論文に目を通すと、ミタに向いた男性の多くが故郷に帰らず、貢納の支払い負担が共同体の女性に重くのしかかったから、この数値は理想的過ぎると判断せざるをえない。当時の同地方のミタの差配はアコラのカシケ、カルロス・ビサ(Carlos Visa)であった[Prema 2000]。

³⁹ この地名表記はチュカヌマ、チカヌマ(Chucanuma/Chicanuma)などとその表記が異なることがある[Diez de San Miguel 1964: xi]。

あげられる。そこではコカの葉、トウモロコシ、綿花、インゲンマメ、サツマイモ、トウガラシ、セロリ、ユッカ、オカなどが栽培された。チュクイート地方の人々とその周辺部の「列島入植地」にいる人々とは深い絆で結ばれていた [Assadourian 2002: 758]。海岸部やアンデス東部に入植していた人々は、故郷への帰属意識を失ってはいなかった。人々の連帯は維持され、「列島」の住人はプーナの住民と同じ母集団を形成していたといわれている [真鍋 2011: 71, 75]。

チュクイート地域のケースから、副王トレドによって 1570 年代に原住民共同体に課せられた貢納やミタが、ポトシの銀貨を大量にポトシ周辺部地域に放出させる引き金となったことが理解されよう。

2. ポトシ周辺部地域全般からポトシへの供給物資の対価として支払われた銀貨

本章第 1 節において、貢納を媒介とするチュクイート地方からポトシへの物資供給の公的な面でのメカニズムについて考察した。さらに（私的な面での）原住民や（同地方にいた）聖職者による経済活動、換言するならば、商業・企業的側面における同地方の人々のポトシへの関与もまた重要である。チュクイート地方は、ポトシに至る幹線道 (el camino real) すなわちスペインによるポトシ支配の動脈であったアンデス商業交易路の中継点 [Diez de San Miguel 1964: 213] に位置しており、ポトシの膨大な人口を支え鉱山を稼働させるのに必要な物資の多くを輸送し提供した。太平洋岸コースからの内外の物資（アレキパやモケグアなどアンデス西部地域や海岸地方からの物資をも含めて）がこの交易路を通じて供給されたため、同地方はきわめて重要な役割を担った。それは、同地方がアルティプラノの南米ラクダ科家畜の産地⁴⁰であり、膨大な数の役畜を用いてポトシへの隊商をいつでも編成しうる能力を有したことも関係する。また人々は商業交易路沿いのタンボ (tambo. 宿営) の運営維持にも努めた [真鍋 1995: 30-34]。海外からの商品のポトシへの輸送・供給も、こうしたアルティプラノの原住民の支えがあってこそ成り立っていたのである。

1580 年代以降になると経済力を身につけた原住民が多数出現する。経済力を身につけるための直接的な方法はポトシ銀山への投資である。1583 年に書かれたルイス・カポーチエ (Luis Capoche. ポトシの鉱山業者にしてクロニスタ) の記録からは、チュクイート地方でインカ時代から続く名門のカシケ、カリ (Cari) の末裔がポトシ銀山においてディエゴ・プーマ鉱脈の鉱山主になっていたことがわかる [真鍋 1995: 41; Capoche 1959: 99]。

またミタの差配 (capitán general de la mita/ capitán enterador de la mita) に就任する者も続出する。例えば、ポマタ村のカシケ、ディエゴ・チャンピーリヤ (Diego Cham-

⁴⁰ 1572-74 年頃、同地方が有していた家畜は約 16 万頭であった [Noejovich 2002: 780]。

billa) は 1618 年と 1626 年に差配を務めた人物であるが、ポトシに同郷の親類を多くもち、スペイン人を代理に据え（ポトシで）大規模な商業を営んでいた⁴¹。ミタ差配は地方とポトシを結ぶ連絡係であった関係上、ポトシ市場に関与するチャンスが大いにあり、彼らはポトシ市場において食料品・日用品を販売するようになった。原住民共同体からポトシに供給された生活必需品は、ポトシで暮らす人々の実体経済の基礎であったから、販売税 (alcabala) が免除されていた。そうした状況のもとで商業を通じて社会的上昇を遂げる者が続出する。地方の原住民がポトシにスペイン人の代理人を置くなど、かつては考えられないことであった。いっぽうでポトシのスペイン人商人も、周辺部地域の産物を商品としてポトシ市場で売りさばくには、彼らの協力が不可欠であった。こうした原住民有力者台頭の例は少なくない [Mangan 2005: 37, 39]。

さらにみていくと、ミタ差配を務めた者の中には鉱山主となる者も出現する。例えば、ポマタ村出身のディエゴ・アコ (Diego Aco) は 1583 年にポトシの 2 つの鉱脈において鉱山主になっていた。ほかにポマタの原住民ディエゴ・グウアカ (Diego Guaca)、ユングヨの原住民ドミンゴ・キンタ (Domingo Quinta) もまた鉱山主であった。この両者もミタの差配を歴任した人物である [真鍋 1995: 43; Capoche 1959: 86, 92, 101, 103, 136]。こうした実態は地方の原住民共同体とポトシとの関係強化を示すものであり、それは物資の供給に影響した。また、チュクイート地方に居住していた聖職者、とくにドミニコ会修道士たち (1567 年には 16 名いた) の経済活動も目立った。彼らが原住民労働者を駆使して農牧畜業、織物業、輸送業などに手を染め、多くの物資をポトシに提供していたことも想起される [真鍋 1995: 35; ワシュテル 1984: 164-165]。

以上のような状況はチュクイート地方だけにみられたものではない。アルティプラノの他の地域においてもまた広くみられたのである。

1603 年にポトシ周辺部地域全般からポトシに流入した食料・日用品を主とする生活必需品 45 品目の各価格単位 (年間) をみてみると、6 品目 (「小麦粉」「羊」「帽子」「大袋」「トランプカード」「ろうそく」) が peso corriente で販売されていた。表示のないものが 3 品目ある。しかしこれら以外の商品の大半 (黒人奴隷を含めて) が peso ensayado で販売されていたことがわかる (第 1 表)。結論。ポトシに運ばれた多くの地方産品の代価が、ポトシのカサ・デ・モネダで鑄造された銀貨で支払われたものと判断できる。

⁴¹ [真鍋 1995: 42]。「ディエゴ・チャンビーリヤ」については、ジョン・ムーラの論文によく登場する [Murra 2002: 786-787 参照]。またロベス・ベルトランも有力カシケの例としてチャンビーリヤを取り上げている。ポトシやオルロにぶどう酒やアヒなどを販売する商店を所有していたこと、リヤマの飼育用として牧畜用地を 15 から 20 ほど所有していたこと、それから太平洋岸のロクンバやサマの溪谷に所有する土地ではぶどう酒やアヒをつくっていたことなどを紹介している [López Beltrán 2016: 209]。

第1表 ポトシにおいて年間に消費された商品とその価格(1603年)

商品名	合計額	ペソの種類/原語で表記する
小麦粉	1,642,500	pesos corrientes
チチャ酒	1,024,000	pesos ensayados
ぶどう酒	500,000	pesos ensayados
牛	28,000	pesos ensayados
羊	100,000	pesos corrientes
リヤマ	120,000	pesos ensayados
アルパカ	400,000	pesos ensayados
ココ	360,000	pesos ensayados
砂糖	48,000	pesos ensayados
アヒ	56,000	pesos ensayados
クスコとチュキアゴ、チュキサカその他からの保存食品	30,000	pesos ensayados
サトウキビの蜜	16,000	pesos ensayados
パリアとタリハその他の産地からのチーズ	25,000	pesos ensayados
ブタのラード	100,000	pesos ensayados
ハム、ベーコン、ブタの舌(タリハ、パリアその他の産)	30,000	表示なし
チャルキ(干し肉)	45,000	pesos ensayados
アレキバからの物資(品名は不明)	5,000	表示なし
イチジク	12,000	pesos ensayados
海産魚	24,000	pesos ensayados
チュクィートの湖産魚	30,000	pesos ensayados
魚類	12,000	pesos ensayados
オリーブ	20,000	pesos ensayados
オリーブ油	24,000	pesos ensayados
酢	32,000	pesos ensayados
ワラ(paja)とマテ茶	91,250	pesos ensayados
野菜	21,900	pesos ensayados
果物	109,500	pesos ensayados
トウモロコシ(粒)	280,000	pesos ensayados
チューニョ	120,000	pesos ensayados
ジャガイモ	120,000	pesos ensayados
オカ	120,000	pesos ensayados
カステイーリヤ風の衣服	400,000	plata ensayada
トゥクマンの麻布	100,000	表示なし
キトのラシャ、ワヌコのベーズなど	100,000	pesos ensayados
粗布(sayal)	14,400	pesos ensayados
帽子	182,000	pesos corrientes (=106,480 pesos ensayados)
リヤマの毛で作った衣類(ropa de abasca)	126,000	pesos ensayados
リヤマの毛で織った布(de cumbes)	6,000	pesos ensayados
(粗布もしくは革製の)大袋(costal)	100,000	pesos corrientes (=64,000 pesos ensayados)
靴作りのためのなめし革	54,000	pesos ensayados
トランプカード(baraja)	21,900	pesos corrientes
金具(鉄具)(herraje)	26,700	pesos ensayados
蠟製品(cerero)	26,000	pesos ensayados
(ブラジルからの)黒人奴隷450人	92,500	pesos ensayados
ろうそく	132,500	pesos corrientes (=84,000 pesos ensayados)

出所：[Jiménez de la Espada 1885: 126-132]。各商品の「量」や「単価」等については、すでに別稿で考察を終えている [真鍋 2011: 73 参照]。

III 結び

本稿では、植民地時代前半期ペルー副王領における銀貨の製造（鑄造）と流通を考察するために、第5代ペルー副王トレド登場以前の時期と登場以後の時期とに分けてそれぞれの事項を考察した。

副王トレドは植民地支配体制の確立に尽力したが、その一環が王権によるポトシ銀山の掌握であり、ポトシのカサ・デ・モネダにおける peso ensayado の製造であった。peso ensayado は経理上価値を計算するためのものであり、品位（銀の含有量）がバラバラの貨幣（peso corriente）が造られていた状況を改善するべく、きちんと統一された貨幣として出現した。

ポトシ周辺部地域へのポトシ銀貨の流出については、チュクイート地方のケースをとりあげて検証した。とくに副王トレドの時代に入って貢納とミタの規模が著しく高められ、このことがポトシ周辺部地域から物資や労働力をポトシにいちだんと引き出し、その対価として大量の peso ensayado 銀貨がポトシから流入したことがわかった。そしてまた、ポトシ周辺部地域全般から供給された商品の対価として支払われた銀貨の内実を検討すると、ポトシ周辺部地域全般に peso ensayado 銀貨が大量に流入していたことがわかった。

副王トレドの時代以前に出回った peso corriente（流通銀）に関して、ポトシ市の国立造幣局博物館やラパス市の国立民族誌・民俗学博物館（古銭展示室がある）に問い合わせてみたが、その現物は存在しないとのことである。ということは、peso corriente は副王トレドの時代以降、溶解されてリサイクルされた可能性が高いと判断される。またミタ労働者の実態について、本稿での考察は理念的過ぎたように思う。原住民によるミタの回避（共同体からの原住民の逃亡・離脱）、ポトシにおける死亡・残留、ミタ終了後のポトシからの逃亡などの影響を考慮する必要がある。

付記：

本稿の概説は「新大陸における銀貨の鑄造とその流通—植民地時代前半期ポトシの場合—」として、浅香枝編『交差する眼差し—ラテンアメリカの多様な世界と日本』（行路社、2019年）に収録されている。しかし枚挙の関係から多くの部分を割愛・削除したため、学術論文としては十分とはいえず、ここにすべてを掲載した。

謝辞：

ラパス市在住の加藤亜以氏は現地での関係機関に何度も足を運んでくださり、また貴重な人脈を通じてたくさんの情報を集め提供してくださいました。ボリビア多民族国の歴史家 Clara López Beltrán 教授からはたいへん貴重なご助言をいただきました。また鳥根県教育庁文化財課世界遺産室主催の鉱山比較検討会に集われる皆様、石見銀山資料館の仲野義文館長、石見銀山世界遺産センター関係者、公益財団法人・古代オリエント博物館の津村眞輝子氏、同博物館の外国コイン研究会の皆様、東京大学大学院の佐治奈通子氏、鳥根県立古代出雲歴史博物館関係者からも多くのことを教わりました。ありがとうございます。ここに記して謝意を表します。最後に、南山大学准教授の浅香幸枝氏、行路社の楠本耕之氏にも御礼を申し上げます。

参考文献

Andrien, Kenneth J.

1985 *Crisis and Decline The Viceroyalty of Peru in the Seventeenth Century*, University of New Mexico Press, Albuquerque.

Arduz Eguía, Gaston

1985 “Sobre el régimen monetario colonial.” *Historia y Cultura*, vol.8, Sociedad Boliviana de Historia, Editorial Don Bosco, La Paz, pp.135-141.

Arzáns de Orsúa y Vela, Bartolomé

1970 *Anales de la Villa Imperial de Potosí*, Ministerio de Educación y Cultura, Potosí.

Assadourian, Carlos Sempat

2002 “La política de virrey Toledo sobre el tributo indio: el caso de Chucuito.” en *El hombre y los Andes homenaje a Franklin Pease G.Y.* (Tomo II), por editores de Javier Flores Espinoza, Rafael Varón Gabai, Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, Lima, pp.741-766.

Bakewell, Peter

1984 *Miners of the Red Mountain Indian Labor in Potosi 1545-1650*, University of New Mexico Press, Albuquerque.

1988 *Silver and Entrepreneurship in Seventeenth-Century Potosí: The Life and Times of Antonio López de Quiroga*. The University of New Mexico Press, Albuquerque.

Brown, Kendall W.

2012 *A History of Mining in Latin America from the Colonial Era to the Present*, University of New Mexico Press, Albuquerque.

Cañete y Domínguez, Pedro Vicente

1952 *Guía histórica, geográfica, física, política, civil y legal del gobierno e intendencia de la provincia de Potosí*, Editorial Potosí, Potosí.

Capriles Villazón, Orlando

1977 *Historia de la minería boliviana*, Bamin, La Paz.

Capoche, Luis

1959 *Relación general de la Villa Imperial de Potosí*, edición y estudio preliminar por Lewis Hanke, Ediciones Atlas-Biblioteca de Autores Españoles, Madrid.

Diez de San Miguel, Garci

1964 *Visita hecha a la provincia de Chucuito en el año 1567*, ed. Waldemar Espinoza Soliano, Casa de la Cultura del Perú, Lima.

Fernández, Luis Alfonso

1979 “La real Casa de la Moneda (Potosí).” en *La real Casa de la Moneda (Potosí)*, dirección de Hugo Boero Rojo, Editorial Los Amigos del Libro, La Paz-Cochabamba, pp.55-132.

Fisher, John

2000 “La producción metalífera.” en *Historia general de América Latina, III-1 Consolidación del orden colonial*, por Alfredo Castillero Calvo, Allan Kuethe, Ediciones UNESCO/ Editorial TROTTA, París, pp.151-175.

Hamilton, Earl J.

1977 (reprint) *American Treasure and the Price Revolution in Spain, 1501-1650*, Straus and Giroux, New York.

Hanke, Lewis

1965 “Producción de plata en Potosí.” en Bartolomé Arzáns de Orsúa y Vela, *Historia de la Villa Imperial de Potosí*, edit. por Gunnar Mendoza y Lewis Hanke, tomo III, Brown University Press, Providence, pp.488-491.

林邦夫

1977 「16世紀における新大陸貿易とスペイン国家財政」、『史学雑誌』、第86編第2号、1-32頁。

Jiménes de la Espada, Marcos

1885 “Descripción de la Villa Imperial de Potosí, año de 1603.” en *Relaciones geográficas de Indias*, vol. II, Ediciones Atlas, Madrid, pp.372-385.

近藤仁之

2011 『ラテンアメリカ銀と近世資本主義』、行路社。

López Beltrán, Clara

1988 *Estructura económica de una sociedad colonial Charcas en el siglo XVII*, Ira. Edición, La Paz.

1998 *Alianzas familiares elite, género, y negocios en La Paz, siglo XVII*, IEP, Lima.

2016 *La ruta de la plata: de Potosí al Pacífico, caminos, comercio y caravanas en los siglos XVI y XIX*, Plural Editores, La Paz.

真鍋周三

1995 『トゥパック・アマルの反乱に関する研究—その社会経済史的背景の考察—』、神戸商科大学経済研究所。

2004 「16世紀ペルーにおけるスペイン植民地支配体制の成立をめぐって」、『人文論集』、第39巻、第3・4号、神戸商科大学学術研究会、297-347頁。

2011 「植民地時代前半期のポトシ銀山をめぐる社会経済史研究—ポトシ市場経済圏の形成—(前編)」、『京都ラテンアメリカ研究所紀要』、No.11、京都外国語大学、57-84頁。

2012 「植民地時代前半期のポトシ銀山をめぐる社会経済史研究—ポトシ市場経済圏の形成—(後編)」、『京都ラテンアメリカ研究所紀要』、No.12、京都外国語大学、1-31頁。

2013 「植民地時代後期ペルー・モケグア地域産アグアルディエンテの流通をめぐって—ブルボン改革との関係で—」、『人文論集』、第47巻、兵庫県立大学、34-54頁。

2017 「17世紀ポトシにおけるビクーニャスとバスコンガドスの戦い(1622~1625年)の社会経済的背景—バスク人の動向を中心に—」、『人文論集』、第52巻、兵庫県立大学、63-85頁。

2019 「新大陸における銀貨の鑄造とその流通—植民地時代前半期ポトシの場合—」 浅香幸枝編 『交差する眼差し—ラテンアメリカの多様な世界と日本』、行路社、2019年、83-98頁。

Mangan, Jane E.

2005 *Trading Roles: Gender, Ethnicity, and the Urban Economy in Colonial Potosi*, Duke University Press, Durham and London.

Marchena Fernández, Juan

2000 “Albanza de corte y menosprecio de aldea. La ciudad y Cerro de Potosí.” en *Potosí plata para Europa*, compilador de Juan Marchena Fernández, Universidad de Sevilla, Fundación El Monte, Sevilla, pp.15-71.

Mendieta Pacheco, Wilson

1995 *La acuñación de monedas en Potosí*, Casa Nacional de Moneda, Banco Central de Bolivia, Potosí.

2000 “La Casa de la Moneda de Potosí: el monedero de los Andes.” en *Potosí plata para Europa*, compilador de Juan Marchena Fernández, Universidad de Sevilla, Fundación El Monte, Sevilla, pp.243-261.

Mendoza, Gunner

1965 “Lista preliminar de gobernadores de Potosí, 1545-1740.” en Bartolomé Arzáns de Orsúa y Vela, *Historia de la Villa Imperial de Potosí*, edit. por Gunnar Mendoza y Lewis Hanke, tomo III, Brown University Press, Providence, pp.479-485.

Mira, Guillermo

2000 “Panorama de la organización y las bases de la producción de plata en Potosí durante el periodo colonial (1545-1825).” en *Potosí plata para Europa*, compilador de Juan Marchena Fernández, Universidad de Sevilla, Fundación El Monte, Sevilla, pp.105 – 124.

Murra, John V.

1996 “El control vertical de un máximo de pisos ecológicos y el modelo en archipiélago.” en *Comprender la agricultura campesina en los Andes Centrales, Perú y Bolivia*, por Pierre Morlon, compilador y coordinador, IFEA y CBC, Lima, pp.122-130.

2002 “La correspondencia entre un “capitán de la mita” y su apoderado en Potosí.” en *El hombre y los Andes homenaje a Franklin Pease G.Y.* (Tomo II), por editores de Javier Flores Espinoza y Rafael Varón Gabai, Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, Lima, pp.785-794.

Noejovich, Héctor Omar

2002 “Las visitas de Chucuito en el siglo XVI: en torno a la *visita secreta*.” en *El hombre y los Andes homenaje a Franklin Pease G.Y.* (Tomo II), por editores de Javier Flores Espinoza y Rafael Varón Gabai, Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, Lima, pp.767-783.

Omiste, Modesto

1981 *Cronicas potosinas* (Tomo Primero), Impreso por “El Siglo” Ltd., Potosí.

1996 *La casa de moneda de Potosí 1572-1891*, Ediciones Casa de Moneda, Banco Central de Bolivia, Potosí.

Paredes, Ivlián de

1973 *Recopilación de leyes de los reinos de las Indias. mandadas imprimir, y publicar por la majestad católica del rey don Carlos II. nuestro señor*, dividida en cuatro tomos, Tomo segundo, ediciones Cultura Hispánica, Madrid.

ポランニー、カール

1980 『人間の経済 I—市場社会の虚構性—』、玉野井芳郎、栗本慎一郎訳、岩波書店。

Premo, Bianca

2000 “From the Pockets of Momen: The Gendering of the Mita, Migration and Tribute in Colonial Chucuito, Peru.” *The Americas* (A Quarterly Review of Inter-American Cultural History), Vol.57, Number 1, pp.63 – 94.

Saignes, Thierry

1987 “Ayllus, Mercado y coacción colonial: el reto de las migraciones internas en Charcas (siglo XVII).” en *La participación indígena en los mercados surandinos estrategias y reproducción social siglos XVI a XX*, compiladores de Olivia Harris, Brooke Larson y Enrique Tandeter, Centro de Estudios de la Realidad Económica y Social, La Paz, pp.111-158.

Salazar-Soler, Carmen

2003 “Quilcar los indios: a propósito del vocabulario minero andino de los siglos XVI y XVII.” en *Los Andes: cincuenta años después (1953-2003) Homenaje a John Murra*, compiladores de Ana María Lorandi, Carmen Salazar-Soler y Nathan Wachtel, Pontificia Universidad Católica del Perú, Fondo Editorial, Lima, pp.281-315.

島根県立古代出雲歴史博物館、石見銀山資料館

2017 『世界遺産登録10周年記念 石見銀山展 銀が世界を変えた』、報光社。

Sierra, Lamberto de

1964 “Reales quintos pagados a SM desde 1 de enero de 1556 hasta 19 de julio de 1736.” en *Colección de Documentos Inéditos para la Historia de España*, tomo 5, Academia de la Historia, Madrid, pp.170-184.

ワシュテル、ナタン

1984 『敗者の想像カーインディオのみた新世界征服一』、岩波書店。

